カリキュラム評価による改善の試みを

田中統治
教育学系教授

何のための教育評価か

本来、教育評価は教育実践を振り返り、その改善を図るために行うものである。したがって、評価を行うための情報が豊富に集まらないと、十分な改善が行えない。教育評価は教育に関する情報を収集する活動であるといってよい。これまで、本学ではこうした教育評価に使える情報が豊富に集約されてこなかった面がある。法人化を迎えて、教育評価の本義に立ち返り、教育改善を図るために知恵を出し合うことが必要である。

ここでは、筆者が専門とする教育課程学の立場からいくつかの提案を行いたい。ここで提案する内容は初等中等教育の場で実践されてきたものが多い。それが高等教育においてどれほど有効であるか、その実践的な検証が必要なことは言うまでもない。しかし、「わかる授業」を行うことは学校教育に共通する課題である。この課題を達成するためカリキュラムの評価による教育改善を提案する。授業の問題は、それをカリキュラムの構成要素の中に位置づけて考えたい。

「わかる授業」の達成に向けて

本学ではTwinsのアンケート機能を使って授業評価が始まった。まだ回答率が低いけれども、これは一定の「義務化」によって高められるだろう。ただ問題は評価項目の中に授業の理解度を尋ねるものがないことである。間接的に推測できる設問はあるけれども、やはり直接、「授業の内容をどれくらい理解できたか」をきいてみたい。なぜなら、その結果がカリキュラムの評価にとって貴重だからである。

授業の理解度は多様な要因によって規定される。教員の指導法に起因する場合が多いことは確かである。しかし、カリキュラムの組み方に無理があって、授業がわから

なくなっていることがありうる。この状況を筆者は「不幸な出会い」と呼ぶ。たとえば、必修科目の内容が授業者の要求水準と学習者の準備水準の間で乖離しているケースである。この場合、両者をすり合わせないと、相互に不信感を生じやすい。その原因は、誰のせいでもなく、カリキュラムによるものである。「わかる授業」はこうしたカリキュラムの構成を改善しなければ、十分に達成できない。

カリキュラム評価の視点

カリキュラムを評価するとき、対象となるカリキュラムが4つの次元をもつことに留意しなければならない。すなわち、①制度次元（設置基準）、②計画次元（教育課程）、③実践次元（シラバス）、及び④経験次元（学習経験）である。このうち①～③はペーパープランとしての「紙」キュラムであるので把握しやすい。しかし、④は教育改善にとって重要であるにもかかわらず、その内容を調べることが困難な次元である。このため、経験次元のカリキュラムを評価するための工夫が必要である。

そこで、授業評価のデータを役立てることが考えられる。すなわち、学生の理解度や関心度が低い授業科目について、その原因をカリキュラム構成上の問題点も含めて検討するために利用するわけである。そうすれば、教員の指導法のみに起因しているわけではないカリキュラムの不都合が明確にできる。学生や院生が経験しているレベルで、カリキュラムの機能を評価する道が切り開かれる。

カリキュラムの語源はラテン語のクレレ（走る）に由来するが、これが走路→学習の道筋→学習経験の総体にまで敷衍されてきた。現在のカリキュラム研究はこの経験次元にまで踏み込んで進められている。その理由は、実践者の教育意図どおりに学ばれるわけではないカリキュラムの実質面が問われているからである。教育改善を図るためには経験次元においてカリキュラムを評価しなければならない。授業評価の結果は指導法を含むカリキュラムの改善に役立てたいものである。

本学のカリキュラム評価の現状

本学はカリキュラムに関する学生からの相談や苦情に対応する体制をもっている。人間学類の場合、教育課程専門委員会が学生代表からカリキュラムへの要求を聞く機会を設けて、次年度から改善できるものは即応している。この体制は他大学ではみられないユニークな教育改善のシステムである。教員と学生の間で緊張関係を生ずる場合もあるけれども、両者がカリキュラムをめぐって話し合うなかで、結果的にカリ

キュラムの評価が行われているようである。

ただし、学生が集約してくる改善要求のみでは、カリキュラム評価の内容が限られてくる。本学が教育目標に掲げていることが、どれだけ達成されているかを知るためには、大学としてカリキュラム評価のシステムを立ち上げる必要がある。

たとえば、慶応大学のSFC(湘南藤沢キャンパス)では、外部委託による授業調査システムが円滑に稼動しているという。本学にそうした財源的な余裕はないかもしれないが、これまで学生にまかせてきた調査機能をwebsiteによって本格的に果す時期に来ている。

提案

①カリキュラムの定点観測を行うこと

カリキュラムの改善は現状の把握から始めるべきであるので、授業の理解度を中心として継続的に調査する「定点観測」システムを立ち上げる。SFCの場合、ほぼ同じ質問紙によって12年間のデータを蓄積している。こうしたデータの集積が法人化後は大きくものをいう。専門の部署を設けて、全学のカリキュラムをモニターする役割を担う。

②授業評価のデータを活用すること

授業評価は開始されたばかりだが、この結果は「経験された」レベルでカリキュラムを診断するために、役立てたい。そのためには、共通項目に加えてオーダーメイドの設問が必要である。定点観測に使う部分とは別に、個々の科目や授業の特性に即して尋ねる項目を加味していくことを考えたい。これらのデータはカリキュラムの質的な改善に不可欠である。

③改善の効果を時系列で比較すること

これらのデータをもとに、どう修正を図り、その結果、改善がなされたかを確認する必要がある。教育の効果を数値で測定することは困難であるが、しかし、不可能ではない。短期・中期・長期的な比較データをもつ強みは計り知れない。必要ならば、卒業生による回顧的な評価調査や、入学者選抜方式別による学生の追跡調査を行ってよい。

以上の提案は、本学の教育評価情報を豊富にし、これを改善につなげるためのものである。この評価法を活かすには、教員に、教師という立場を越えて、学生と率直に対話する力が求められる。評価は本来、対話である。

(たなか　とうじ／教育課程学)